UP選書

王朝女流文学の世界

秋山虔

東京大学出版会

UP選書

王朝女流文学の世界

秋山虔

東京大学出版会

著者略歴

1924年　岡山県に生まれる
1947年　東京大学文学部国文学科卒業
現　在　東京大学文学部教授

主要著書

『紫式部日記』（日本古典文学大系，共著，1958年，岩波書店）
『源氏物語の世界』（1964年，東京大学出版会）
『王朝女流文学の形成』（1967年，塙書房）
『源氏物語』（1968年，岩波書店）

現住所

東京都板橋区赤塚 5-25-6

王朝女流文学の世界　UP選書95

1972年6月10日　初版

検印廃止

© 著者　秋山虔（あきやま けん）

発行者　福武直

発行所　財団法人　東京大学出版会
113　東京都文京区本郷　東大構内　電話（811）8814　振替東京59964

精興社印刷・矢島製本

1393-05959-5149

王朝女流文学の世界　目　次

平安文学一面おぼえ書……一
＊＊＊
光源氏論……二
源氏物語の人間造型……五〇
源氏物語の自然と人間……六一
源氏物語の虚構と文体……八〇
源氏物語と紫式部日記……九八
源氏物語の成立・構想——戦後の成立論の始発をめぐって——……一〇九
＊＊＊
枕草子の本質……一三九
枕草子・美意識を支えるもの……一五二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

＊＊＊
日記文学論……一六六
——作家と作品とについて——
＊＊＊
摂関時代の後宮文壇……一九三
——紫式部の視座から——
＊＊＊
古典と現代……二〇八
一　古典文学鑑賞の問題……二〇八
二　古典の現代的評価についての断想……二二五
三　古典と現代……二三三
あとがき

平安文学一面おぼえ書

野村精一氏は「古今集歌の思想」（『日本文学』昭41・12）という論文で、古今集の歌を、「時間的、局地的な情況だけを担っていたうたが定着し、客観化された存在として、作者によって対象化されたのである。これは、感性的な言語使用から、より知性によって支配される言語の成立ともいいかえうる」ととらえ、その歌びとたちを、「おそらく日本で最初にもっとも日本的なメタフィジックを持ち、且つ詩的に客観化した人々であった。より端的には、それは〈絶望〉の美学だったと置きかえてもよい」といわれた。この野村論文の趣旨をいま紹介するゆとりはないが、たとえば、

　ことならば咲かずやはあらぬさくら花見る我さへに静ごころなし
　とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

などの歌につき「不可抗なるものへの言語による反逆とその挫折の過程が描かれるといってよい」、「うたのことばの機能的な特性が、そのうたを創り出す精神の構造と不可分のものであり、あるいはそのような機能なり構造なりを、一体として可能にしている詩人たちの言語思想を代表するもの

であることを示すに足りる」などと説明されたことは印象的である。古今以後の平安文学の、少なくとも一つの根軸が、この古今集歌の把握のなかには示されているように思われるからである。

逸脱するようだが、私はいま『万葉の風土』（昭31）の著者犬養孝氏の『万葉の旅』（昭39）という三冊本を机上に披げている。そのはしがきに「（万葉の歌の）より正しいより生きた理解のためには、あたうかぎり時代をむかしにひきもどして見ると同時に、歌の生まれた風土におきなおして見なければならない」「歴史的社会的な条件を背負った作者が、異なった風土におかれてかもす抒情のあり方は、（その歌のよまれた現地に）ゆくたびに新たな理解をもたらしてくれるようである。万葉の歌がどれほど深々と風土のなかに息づいているかをしみじみ思うのである」という著者は、その歌を生んだ風土を、秀抜な多くの風景写真に捉えた。この写真集を見ながら、添えられる万葉歌を誦するとき、たしかに歌のかたちと風景とは即融し、私は感興をそそられる。この本を携行して、ここに撮影されている現地に赴きたい。そのことが万葉歌の形象への接近に寄与するであろう、とともに、その歌を生んだ風土への愛の喚起となる、という両者の媒介の関係が信じられるのである。

もちろん、万葉歌の風土との連関は、諸々の段階を無視することは許されまい。人間と自然との交渉は、直接無媒介ではありえないので、ひろくいって社会体系の形成と不可分の関係にある。が、この自明の理を考慮にいれても、万葉歌は直接自然に抱かれ、自然の律動をそこにかたどる素朴さを失わない。じつはそのことからしても、万葉歌と現代との絶対に越えがたい距離を説明すること

ができるのだろう。私たちの万葉歌へのなつかしみ、あこがれの思いは、自然に埋れる万葉の精神が、もう私たちのなかには決定的に喪失してしまったからであるといえないか。

古今集の歌境を、私たちは万葉のようにあこがれはしないだろう。それはなつかしまれあこがれられるものではないからである。という私は、けっして古今集歌を貶しているのではない。万葉は遠く及びがたいが、古今は、私どもが古今にはじまる文学遺産と意識的、無意識的につながるという意味で、私どもの内面の問題でありすぎるところがあるともいえるからである。

三月下旬から四月にかけて、毎日、新聞に花便りが載るのはなぜか。さくらの花は日本人の生活と切っても切れぬ縁の花だが、そのことは古今集歌のさくらを除外しては説明できぬであろう。（もっとも日本人のさくら愛好が固有のものであることについては、たとえば大久保正氏「梅と桜」〔「万葉の伝統」昭32所収〕のごとき論考によって明らかにされているが、それとこれとは別問題である。）花見とは縁のない私の心も、その時候、たしかに不安定にゆらめく。さくらが美しく、その美しさがまた、それの惜しまれる短命とあいまっているからだが、またそこに、おのずから、迅速に過ぎゆく人生を思い見ることになるからでもある。古今集に比較的なじむことの多い私に、ことさらにそのさくらの歌群が忘れられないのでもあるまい。古今集歌を規範としてきた日本人の心性が、私をも例外であらしめないのではないだろうか。

しからば、古今集歌がなぜそのように内的な規範としてありえたのであろうか。もちろんいろい

ろと説明の便宜があるのだろう。が、ここで指摘しておきたいのは、さきの野村氏の説明とも関連するが、それがある何ものかを、何事かを、何のためにか表現するのでなく、そこに表現される世界が、それ自体の秩序的な空間として客観的に自立している、そのような歌の風体だという点にあるのであろう。前記した万葉歌と風土との連関ということと考えあわせていただきたい。万葉歌が、それと作用被作用の不可分離な関係で自然とつながる、その限りで、万葉時代を回復しがたい過去として見送った歴史段階には、それが稀有の達成であればあるほど讃嘆すべき、そしてある時は馴じめぬ他者でありさえするのに、古今集歌は、それを生み育てた母胎・環境からの剝離を、と同時にその剝離の余儀なさをも、言語の秩序の世界にとりこめて証す、一つの精巧な自立的空間を樹立することになった。そのことによって、それは単に撰集時代の所産であることを超越して、不断の再生産の力源を、その表現された世界そのもののなかに保ちつづける光栄を確保したということになろうか。

いま私は古今集歌の風体を具体的に分析する作業は敢て切りすてる。またいまはそうした古今歌風の形成過程についての追尋や、古今集撰者はじめ寛平延喜歌壇の人々の抱負や意識などについて考察する場ではない。たしかにこの古代社会の顕著な転換期の、全歴史動向との相関関係において和歌の価値上昇と古今集歌の風体の形成は考えなければならないが、そのこととは別次元の問題として、古今集歌が人々の魂に君臨する機構を見つめたいのである。

歌が日本人の生活のなかの言葉として、多面的な機能と様相をもって生きつづけてきたことは、古今集の以前も以後も同様である。が、古今集歌の生誕前後から、それが平安京の貴族たちの生活にとって、ある特殊な機能を果すようになったことは注目されねばならない。いまは敢て歌壇史的な視点を除外しておく。藤岡忠美『平安和歌史論』（昭41）、山口博『王朝歌壇の研究』（昭41）などに拠ればよろしいであろう。またごく最近には村瀬敏夫『古今集の基盤と周辺』（昭46）、橋本不美男『王朝和歌史の研究』（昭47）のごときが、それぞれに和歌史の展開とその支盤を、歴史的ないし構造的に追求しているが、ここでは要するに、日常実生活の次元と別個に、歌という自立した言語の秩序の世界を敷設し、そこに人間交流の場を仮設する精神の作用、それが古今集歌の風体の確立によってみちびかれたものであろう、ということを私はいいたいのである。歌合・歌会の歌、屏風歌の詠集など晴れがましい営為ももとよりあった。が、それよりも歌は贈答される生活のなかの言葉として、はるかに一般的であったといえよう。しかしながら、そのことが、いまは追体験できぬこの時代の特殊な風俗であったとのみ片づけることはできないのである。贈答が、日常的な、しゃれた挨拶以外の何ものでもないとしかいえぬ場合もあろう。その次元から、歌の贈答こそが、入間関係の断絶から、また疎外された人間であることからの回復を祈念する唯一の術法となるという次元まで、その幅は非常に大きい。引歌による会話、消息なども贈答に準ずると見てよいが、これと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

て遊戯的な頓知くらべであるにすぎぬものから、引歌によってのみわが思いを客観化する、そのことによって本歌の意味をわが表現として再生産していくものまで多様であるといえよう。が、割りきっていってしまえば、それらが単に円滑な通じ合いの方法であるといってすまされず、かえってその基底には人間連帯への絶望が識域の内外に深く横たわっているといってよいのだろう。たとえばこういう消息が通わされる。

男　心ぼそげなる山住みは、人とふものと聞きしか、さらぬはつらきものといふ人もあり。

女　聞こゆべきものとは、人よりさきに思ひよりながら、ものと知らせんとてなん。露けさは、なごりしもあらじと思うたまふれば、よそのむらくもも、あいなくなん。

これは蜻蛉日記、天禄二年八月初、兼家と道綱母との間にかわされたものである。天禄二年八月といえば、例の鳴滝籠りの後まもないころである。兼家の妻であることに堪えられず、そこからの脱出を決意して西山に籠った道綱母であったが、しょせんふたたび元の枝に帰って、年来の夫婦生活を続行せざるをえなかった。そうした彼女と兼家との間には埋められぬ罅隙がいかんともしがたく横たわっていたのである。そのころのこと、修法とて山寺にこもった兼家から、右のような消息が寄せられ、彼女からまた右のように返されたのであるが、兼家の文とて、道綱母の文とて、その発想の基点は、それぞれ、

忘れぬと言ひしにかなふ君なれど問はぬはつらきものにぞありける

今ははやうつろひにける木の葉ゆえよその村雲なにしぐるらむ　（後撰集・古今六帖・本院のくら）

（元良親王集・続後拾遺集）

の歌にある。それらの歌を軸にすえての消息文なのであって、生まの本心の直接の触れあいはここにはない。逆にいえば、もはや生まの本心の触れあいなどありうべくもないかれらであるがゆえに、こうした消息文は通わされた。かれらはもっぱら本歌の論理に順応し、そこにいわば韜晦して、消息文をつづる。そして、それらがとりかわされる限りにおいては、まことに優雅な表情をたたえた交信が成り立っている。そのことだけでかれらにとってはどんなにかなぐさめとなるであろう。いいかえれば、かれらは、ここにあやなされる言語の世界の敷設と吻合とによって、その内実においては回復すべくもない――というよりもともと本質的にいってそういうものはなかったというべきかもしれないが――連携をとりとめているのであるといえよう。にもかかわらず、そうした言葉による和合の形姿が、かえってそれ自体のなかに、またかれらの疎隔を決定的にきわだたせるものとなっていることもまた余儀ないことである。実生活と切断された別個の秩序を達成し、そのことゆえに両者の交信を成りたたせえた言葉は、しかしながらそれがあくまで実生活のなかから発せられるのである以上、その言葉の世界に、はしなくも実生活の真相が転封される、という理である。このような機構は、古今集歌の洗礼を経験した精神における、言語生活のやるせない特権であるといわねばならないだろう。

いま私は多くの場合を提出し説明することができないが、歌の贈答や引歌による交信をもって、いわゆる「みやび」――貴族たちの優雅な社交的教養と目することは浅い一面観であるといっておきたいのである。が、そればかりでなく、歌の贈答や引歌による交信は、それが平安文学のもっとも典型的な女流文学の方法として、新しい世界像、人間像の掘り起こしに進んだのであることをも強調したい。平安文学を代表するものが、物語日記等の散文文学であるということは一往の常識であるといってよいが、源氏物語以前の、男性の作者とされる物語群から女流の散文文学を峻別する顕著な一つは、その文章と内的にかかわる歌の問題である。もちろんそうした男性作物語のなかにも、多くの歌はあり、また引歌による消息文や会話もおびただしい。にもかかわらず物語の地の文は、源氏物語の直前の成立とさえ考えられる落窪物語においてさえ引歌による表現は見ることができない。このことを私はこれら物語の一つの大きな限界であると考えたい。誤解を恐れ、急いでそのことについて説明しておこう。

前記した蜻蛉日記の、天禄二年六月条。長い山籠りに対して京の里邸より下山の勧告がもたらされ、道綱母は心の動揺を禁じえない。そこに父倫寧の来訪がある。父もやはり帰京を強くすすめるのであった。

「げにかくてもしばしおこなはれよと思ひつるを、この君（同じく籠山している道綱）、いとくちをしうなりたまひにけり。はやなほものしね。今日も日ならば、もろともにものしね。今日も明日も、むかへに

まゐらむ」など、うたがひもなく言はるるに、いと力なく、思ひわづらひぬ。「さらば、なほ明日」とて、ものせられぬ。釣りするあまのうけばかり思ひみだるるに、ののしりてもの来ぬ。さなめりと思ふに、心地まどひぬ。……

父倫寧の勧誘の前に、肩肘張った道綱母の姿勢ががっくりと崩れようとするのだが、「『さらば、なほ明日』とて、ものせられぬ」と、父の帰京を語ってのち、「釣りするあまの……」と、「伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつに定めかねつる」（古今集・恋一）をふまえて語りなおされるとき、これは、やがて次に語られる兼家の来訪、そしてやがて兼家によって手もなく拉致される場面をひきだす動力になっているとさえいえるのではあるまいか。進退きわまり、心を決しかねるわが心境を、この古歌に委ね、それによって明確に輪廓づけたのであるが、そのことによって以前の文脈を収束するとともに、それが新しい事態への回転軸となっているという体なのである。単に引歌の形象への依存ではない。古歌を支盤にひきすえ、これを発条として文章を前進させる、いいかえれば文章の書かれる場が、一つの磁場を形成して、その場の自動を促すものとなるのだが、男性作の物語においては、こういう文章の生理はついぞ見られなかったことであろう。男性作の物語の構想の緻密さ、雄大さ、外延的にのびひろがる視界等々、それぞれに指摘されるところだが、そうした世界を語る文章は、語られる事柄を追い語るにとどまる。文章の内発する力を発動して、物語の世界における事態事態のなかから、さらに新しい事態事態を生みつむぐ作用をもちえたであろう

かと問うと、否といわざるをえないのであろう。

女流文学が、日常の歌の贈答や引歌による消息や会話の方法をもって文章を書いたということは、一面ではその主体の未開、晦暗を示すと見る向きもないわけではないが、一面ではそれは表層的な事実性にべったりの、男性のかげりなき散文とちがって、生活の内部にかかえこんだ切実な混沌を歌によってのみ自覚し、歌によって顕化する文章の方法の樹立へと向かうものだったのである。

さて、この時代の女の精神の位相が、男のそれといかにことなるものであったかは、和辻哲郎氏の『『もののあはれ』について」（『日本精神史研究』大正15）以来しばしば論じられてきたことであるが、和辻氏の言葉を借りれば「緊張し、高まり、妊み、さうして生産する」その精神は、男とのつながりに生きる女の、決して癒されることなき絶望と表裏する。しかも、これまた和辻氏の言葉であるが、「明らかに女らは、精神的に言つて、男より上に出てゐる。しかし女らには、このより高い立場から男を批評する眼は開けなかつた。」そうした女たちにとって、野村氏のいわれる古今集歌に生誕した〈絶望〉の美学が内的な遺産として無限に再生産され、ますます規範性を明らかにしていく事情、これは今後の重要な研究課題であることを私は疑わない。

光源氏論

一

源氏物語の主人公、光源氏が、いかにも現実ばなれの人間像であり、そのために物語の読者からなかなかにわかにはなじみにくく、共感しがたい一面を呈している、といわれていることは否定できないであろう。源氏物語を、他の物語類とちがって人力を超越する世界、したがって仏にその出現を申請した効験であるととらえ、これが評論に多くの紙数を割いた無名草子においても、光源氏についての論は、意外にきびしく批判的であったが、その無名草子の見解については後に触れる機会もあるであろう。ここでは現代における光源氏評を問題のいとぐちにしたい。私は、以前に谷崎潤一郎氏の「にくまれ口」(『婦人公論』昭40・9)という光源氏論をとりあげて私見を述べたことがある(「源氏物語序説」『源氏物語研究必携』昭42)。そのエッセイはかなり重要な問題を提起しているとも思われるので、なおここで要点をくりかえしたい。谷崎氏は、まずハーバード大学のヒベット氏の、アメリカの学生の間においては、光源氏という主人公は不人気である、という談話を紹介し、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook